

Disclosure Project Intelligence Archive (DPIA)

Daniel Sheehan interview Select_Reel_101_34.mp4

Steven Greer - Daniel Sheehan interview.pdf

Daniel Sheehan Testimony.pdf

Daniel Sheehan Interview

ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ (DPIA)

ダニエル・シーハンのインタビュー

[文中の註 (*) は訳者による]

ダニエル・シーハンは、フロイド・エイブラムズの下で米国憲法修正第 1 条のアソシエイト弁護士となり、NBC ニュースおよびニューヨークタイムズ紙の代理人を務めた。ペンタゴン・ペーパーズ事件ではニューヨークタイムズ紙側弁護人の一人であり、ウォーターゲート盗聴侵入事件の被告側抗弁においては、F・リー・ベイリー法律事務所の法廷弁護人の一人として、ジェームズ・マッコードの代理人を務めた。また、カレン・シルクウッド事件では首席法律顧問を務めた。ダニエル・シーハンはディスクロージャー・プロジェクトの証人の一人として、2001 年 5 月にスティーブン・グリア博士のインタビューを受けた。その中で彼は、ジミー・カーター大統領が議会に UFO 情報の調査を要請したこと、バチカン図書館が UFO や地球外知性体の情報が所蔵されている資料庫の利用を許可しなかったこと、米議会図書館で最高機密扱いの墜落 UFO 写真から一連の記号を写し取ったことなどを語った。

[1]

=====

ダニエル・シーハン：これは 2001 年 5 月に行なわれているインタビューです。スティーブン・グリアとディスクロージャー・プロジェクトは、自らが適切かつ必要と判断するあらゆる方法で、このインタビューを使用する許可を得ています。

私の名前はダニエル・シーハンです。私はワシントン D.C.およびニューヨーク州南部地区で認可された弁護士です。1970 年にハーバード法科大学院を卒業し、開業してから約 30 年になります。私は 1967 年にハーバード・カレッジのアメリカ政府研究と国際関係論で優秀な成績を修め、卒業しました。また、ハーバード大学から 1967 年ローズ奨学生にも推薦されました。ハーバード法科大学院で公民権法論評 (*シーハンが共同創設した論評誌) の編集者をしていた私は、そこを卒業するとニューヨーク市ウォール街にあるケイヒル・ゴードン法律事務所に行き、開業しました。法廷弁護士を 175 人抱える同事務所は、全米一の訴訟法律事務所と目されています。そこで私は、フロイド・エイブラムズの下で米国憲法修正第 1 条のアソシエイト弁護士になったのです。私たちは NBC ニュースおよびニューヨークタイムズ紙の代理人を務めました。ペンタゴン・ペーパーズ事件では、5 人のニューヨークタイムズ紙側弁護人の一人でした。

その後、F・リー・ベイリー法律事務所に移り、そこの 3 人の法廷弁護士の一人になりました。他にはリーとジェリー・アルチがいました。そこではウォーターゲート盗聴侵入事件を扱いました。私たちはジェームズ・マッコードの代理人を務めましたが、ジェームズ・マッコードを説得しジョン・シリカ裁判官に手紙を書くように勧めたのは、私たちの事務所です。その手紙が、実際にウォーターゲート事件と‘ホワイトハウスの配管工’を暴露するきっかけになりました。その後は再びハーバード大学に戻り、最後の学位（*キリスト教社会倫理学および比較倫理学）を取得することに励みました。

[2]

=====

最後の学位を取得中のことです。私はワシントン D.C.にある米国イエズス会本部、国家社会奉仕事務所の首席法律顧問になるように要請されました。そこは重要な政策課題を扱う彼らの公共政策事務所で、私はペドロ・アルペ総長、ローマのファザー・ジェネラルの下、1975 年から 1985 年までそこに勤めました。ですから、ここで述べる出来事があったのはその時期のことです。その事務所に入って 2 年ほど経った頃でした。それが起きたのは 1977 年の 1 月を少し過ぎたあたりだったと思います。私にマーシャ・スミス (Marcia S. Smith) から電話がかかってきました。マーシャ・スミスは米国議会図書館議会調査局 (CRS)、科学技術部のディレクターでした。

彼女は私に、会いたいので来てほしいと言いました。私は出かけて行って彼女に会い、ワシントン D.C.のレストラン、ブルフェザーズと一緒に昼食をとりました。国会議事堂から通りを下ったところです。この昼食中に、彼女は私にこんなことを言ったのです：彼女に下院科学技術委員会から連絡が入った。ジミー・カーター大統領が下院科学技術委員会の議会職員に、米国議会による大規模な調査を実施する意向を伝えたと。調査は二つの事実問題についてでした。

二つの事実問題とは、大統領が当時まだその任にあった CIA (中央情報局) 長官ジョージ・ブッシュ・シニアと会ったことから生じたものでした。これは 1 月、1 月 21 日、実際に会ったのは 1977 年 1 月 22 日だったと思います。カーター大統領は、就任式が終わると CIA 長官を呼び、こう言いました。“未確認飛行物体と地球外知性体の存在を示唆する機密文書を閲覧したい”

そのとき、CIA 長官 (DCI) だったジョージ・ブッシュ・シニアは大統領に、この情報をあなたに提供することはしないと断ったのです。彼が共和党前政権から引き続きその任に留まっていたのは、とても奇妙なことでした。なぜなら、カーター大統領は新しい DCI にティ・ソレンセンを指名していたからです。しかし大統領は、上院の指名承認公聴会でソレンセンを取り下げました。そのため、共和党前政権の DCI がいまだにその任に留まるという予期せぬことが起こり、その DCI が大統領の要求に従うことを拒否したのです。

ジョージ・ブッシュはカーター大統領に、もしあなたがこの情報を望んだとしても、私の任期中にそれを提供するつもりはないと言いました。そしてこう続けました。“もし新しい DCI を就任させる前に情報が必要だというなら、以下の手順を踏む必要があります。まず合衆国議会の下院科学技術委員会に行き、議会が特定の文書を機密解除できるようにするためのあるプロセスを開始するよう、彼らに頼むことです。委員会のメンバーには、機密解除のプロセスを始めるように要求する権限があります” ジョージ・ブッシュは大統領に、委員会のメンバーは議会調査局と協力してそれを行なうことになる、機密解除をするプロセスはあると言いました。

この情報の入手を強く望んでいたカーター大統領は、共和党の DCI と争うよりも、その手順を踏む方を選びました。こうして大統領は、1 月に下院科学技術委員会に連絡し、二つの事実問題を調査するように要請しました。そして、この情報を得るために議会が機密解除できる、あらゆる文書を大統領に提供することを求めたのです。

二つの質問とは、次のようなものでした： 第一に、私たちの政府は、それが機密扱いであるにせよ、ないにせよ、地球外知性体が存在するかどうかの疑問に答える、どのような情報を持っているのか。第二に、政府に入ってくる UFO 目撃報告のうち、何パーセントが調査されたのか。また、それらが私たちの惑星を訪れている地球外文明の輸送機であることを示す、何らかの証拠はあるのか。これらの質問は 1 月に米国議会下院に提出されました。それから間もなく、下院はそれらを議会図書館議会調査局に回しました。

私がこの電話を受けたのは 3 月か 4 月頃だと思います。その日は暖かく、春が始まっていましたから。確かに 4 月のことだったと思います。

スティーブン・グリア： 明確にしておきたいのですが、今のお話のこの背景情報は、どのようにして知ったのですか？

ダニエル・シーハン： マーシャ・スミスからです。マーシャ・スミスは起きているこの状況を語りました。初めは、彼女も私もやや困惑気味でした。というのは、彼女は共和党員だったからです。私は、当時は登録された民主党員でした。面白かったですね。私たちは、言ってみれば異なる世界から来ていました。マーシャはとても保守的で、きわめて技術的、科学的な考え方をする人でした。私はといえば、開業している法廷弁護士であり、憲法訴訟専門家であり、社会倫理と神学の学徒でしたからね。しかし私たちは、昼食の間にすっかり気が合い、彼女は私にこの件の詳細な経緯を教えてくれたのです。

私はイエズス会本部に戻り、オレゴン管区の国家社会奉仕事務所長だったウィリアム・J・デイビス神父にこのことを話しました。そして、バチカン図書館での文献調査を要望する、米国本部からの手紙に連署して貰えるかどうかを訊きました。後になって知ったのですが、バチカン図書館の責任者はイエズス会士でした。デイビス神父は彼の名前を突き止め、住所などの詳細な情報を入手しました。私たちはこの人物に正式な手紙を送り、イエズス会本部の私たちがバチカン図書館のその区分、つまり UFO や地球外知性体の情報が所蔵さ

れている資料庫を利用することはできると訊ねました。1 週間か 2 週間後、実際にはほぼ 2 週間後に返事が届きました。大変驚いたことに、答えはノーでした； 私たちはこの資料庫を利用することができない。

私たちは唖然としました。米国イエズス会本部からの要望が拒否されたのです。米国内には 10 のイエズス会管区があります。世界中のどの地域よりも多く、したがってその影響力もかなり大きいのです。米国カトリック司教協議会はカトリック界の一大勢力でした。ですから、私たちはこの返事を受け取り、大いに驚いたのです。

私たちは、より詳細な 2 通目の手紙を準備しました。それはイエズス会士であるバチカン図書館長に宛てて、誰がこれを求めているのか、何が起きたのか、大統領が CIA（中央情報局）長官と会ったが、この情報を得られなかったのはどうしてなのか、さらに大統領が明確にこの情報を公式要請したこと、もしバチカンがこの情報に課したい特定種類の制限があれば、私たちはそれに従うこと、などを説明するものでした。

そして、私たちは手紙の中でこう約束しました： 私自身が、国家社会奉仕事務所の主席法律顧問としてローマに出向き、文献の調査をする。その際、どのような条件が課されても、それを順守する。こうして私たちは、この 2 通目の手紙を送りました。

2 週間後にその返事が届きました——答えはやはりノーでした； 私たちはバチカン図書館のこの区分を利用することができない。私はマーシャ・スミスに電話をしました。しかしそのことは電話では言いませんでした。私は彼女を昼食に誘い、同じ場所で会いましょうと言いました。私たちはブルフェザーズに行き、一緒に昼食をとりました。そこで私は、彼女にこう言いました。“いいですか。誰もが困惑するでしょうが、答えはノーでした。私たちは利用できないということです”

マーシャはすでに、彼らがしていることの詳細、進めている調査の内容を詳しく説明していました。私も、彼らが調べているその問題に魅了されていました。しかし結末はそういうことでした。

スティーブン・グリア： よりによって、なぜバチカンに行こうと思ったのですか？ 利用を拒否されたバチカンに？

ダニエル・シーハン： えー……彼らは所蔵していることを否定しませんでした。図書館のその区分を利用することはできないと言ったのです。それが結末です。私はマーシャにそのことを伝え、イエズス会本部に戻りました。

[3]

それから 1 箇月か 6 週間後、またマーシャから私に電話がかかってきました。いつもの場所で昼食はどうかと誘われたのです。私は出かけて行って、席に座りました。彼女は私に、

カリフォルニアにあるジェット推進研究所（JPL）の SETI（地球外知的生命体探査）プロジェクトが、翌年の予算を半分に削減されたと言いました。

ジェット推進研究所（JPL）の人々、SETI の何人かのトップ科学者たちは、マーシャに連絡をしてきました。彼らは、ハッチ法があるために、残りの予算を復活させるためのロビー活動ができないと感じていたからです。ハッチ法は米国の連邦法で、公務員が在職中に政府に対してロビー活動をする 것을禁じる法律です。そのため、彼らはマーシャに連絡を取り、持ち上がった問題を知らせたのです。

マーシャは私に、何人かの元宇宙飛行士たちがワシントンに入り、その予算を復活させるために主要議員たちの事務所を訪問することになっていると言いました。そして、私がロビー活動を熟知しており、上下院の多くの議員事務所にも行ったことがあり、その方法を知っていることを理由に、彼らの訪問に同行して貰えるかと訊いてきました。

私は、デイビス神父、スミス神父、ジム・キャロル、テリー・シェイに相談してみると答えました。彼らはイエズス会本部の指導者たちで、私の事実上のクライアントでした。私は全米 10 のイエズス会管区と会う必要はなく、本部の指導者たちに会えばよかったのです。ですから、私はそうしました。私は本部に戻り、彼らに相談しました。彼らは同行してもよいと言ってくれました。実際にはウィリアム・デイビスが私の同行を了承し、彼が他の 3 人に話をし、その結果、彼らの全員が私の同行を了承したのです。

こうして私たちは議員たちを訪問して回りました。様々な議員と会うために 2 日間を費やしました。この問題について実際に議員本人たちとも会いました。その結果……わずか 2, 3 週間のうちに、削減された SETI 予算は復活したのです。おそらく他にも幾つかの物事が進行しており、それらすべてが実を結んだ結果だったのでしょう。ワシントンでは、それが正しい行動だというだけで行なわれることなど、ほとんどありません。ですから、そこには同時進行していた他の要因もあったでしょう。しかしともかく、予算は復活しました。

マーシャは私に電話をよこし、大変喜んでいました。そして、会いたいのではいつもの場所に来てほしいと言いました。私たちはまたブルフェーズズに行き、席に座りました。彼女は、今回のことでは彼らはとても喜んでいいると言ひ、こう続けました。“予算が全額復活したので、ジェット推進研究所（JPL）のトップ 50 人の科学者と SETI プロジェクトはあなたを JPL に招待したいと言っています。そこで非公開セミナーを開催し、あなたに地球外知的生命体探査の神学的意味について話して貰うことを企画していますが、それは可能ですか？” 私はそうしたいと思いました。それができたら嬉しいと思いました。

私は本部に戻り、再び指導者の人たちと相談しました。そして JPL に行くことを了承して貰ったのです。彼ら（*イエズス会）は、事態の進展と共にますますこの問題（*UFO 問題）に大きな関心を払うようになっていました。彼らもまた……バチカン図書館が所蔵するこの種の文献を見ることが許されないという点で、それから完全には遠ざけられていた

のです。そして、そこに何かがあるのではないかと疑い始めていました。あなた（*スティーブン・グリア）には正直に言いますが、彼らはこの問題についてはあまり考えたことがありませんでした。私が彼らに最初に話したとき、彼らはそれについてはあまり考えていませんでした。しかし彼らは、今やその問題が目の前にあることを知りました。ですから、彼らは私が JPL に行くことを了承したのです。

私は再びマーシャに会い、こう言いました。“マーシャ、もし私が SETI プロジェクトのことでジェット推進研究所（JPL）のトップ 50 人の科学者に会いに行くことができるなら、やってみたいことがあります。あなたがここで大統領のために準備しようとしている資料を、もし可能なら私に調べさせてほしいのです。そうすれば私は間抜けにならずに済みまし、少なくとも私たちがここで何を知っているかを知ることができますから”

マーシャは顔をほころばせ、こう言いました。“おそらく手配できるでしょう” 私は、どうすればよいかと訊きました。すると彼女はこう答えました。“あなたを、この問題に関する議会調査局の特別調査員助手にします”

そして彼女は、JPL でのセミナーの準備のためにどのような資料を見たいのかと訊いてきました。私がその答えを考えるのに 1 秒ほどしかかかりませんでした。私はこう言いました。“プロジェクト・ブルーブックの機密にされている部分です” 彼女は笑いながら、ウンと唸りました。そしてこう言いました。“そうですね。彼らがそれを許可するかどうか、私には分かりません。彼らがそれを機密解除するかどうかも分かりません。議会調査局が何かの機密解除を依頼しても、解除するときもあれば、解除しないときもあります。私が手紙を書き、解除するように依頼してみましよう” 私は大変気をよくし、イエズス会本部に戻りました。

それから 1 週間か 2 週間ほどして、彼女から電話がかかってきました。私は出かけて行って彼女に会いました。すると彼女はこう言ったのです。“よく聞いて。驚いたことに、彼らはイエスと言いました。あなたはこの資料を閲覧できます。つまり、私たちはこの資料を閲覧することができるということです。私はこれから……彼らはこれらの機密資料を送ってよこすでしょう……” 彼女は、それが機密解除されたのか、それとも依然として機密なのかは言いませんでした。しかし、私が機密保持誓約の類を求められることはまったくありませんでした。私が彼女から知らされたのは次のことです： 彼らは次の土曜日にその資料を議会図書館に運び込む。私にはそれらを調査する短い時間しか与えられない。私は、素晴らしいと言いました。彼女は私に行くべき場所を教えてくださいました。

[4]

=====

私は、インディペンデンス通りを挟んで議会図書館の向かい側にある、マディソンビル（*議会図書館の新棟）まで行かなければなりませんでした。その建物はできたばかりでした。できたてのホヤホヤでした。中に事務所などはなく、職員も一人もいませんでした。私がそこに行ったのは土曜日の朝です。朝の 10 時頃だったと思います。もうこのときには、

おそらく 5 月の初旬か中旬になっていました。とてもよい天気だったのを覚えています。それは今でも記憶に残る出来事の一つです。よい天気で、日増しに暖かくなってきていました。

私は建物の正面玄関まで行き、辺りを見回しました。そこに多くの人がいる状況ではなかったからです。正面玄関には守衛が一人いました。私が彼に名前と身分を告げると、彼はどこかに電話をかけ、こう言いました。“あなたは入館を許可されています” 彼は私を中に入れました。彼は起きていることに興味津々の様子で、私と一緒に中に入り、こう言いました。“あなたはこの場所に行くように言われています” こうして私は中に入り、階段を降りてマディソンビルの地階に行ったのです。守衛も、あなたが行くべき場所はこれこれだと言いながら、一緒に階段を降りました。私は彼が離れるのを待っていました。というのは、彼はその場所まで私に付いてくる様子だったからです。私は彼に言いました。“結構です。もう十分です。その場所は自分で見つけれられますから” 彼は、分かりましたと言って立ち去りました。

私はその部屋を探しながら、廊下を歩いていきました。廊下の突き当りを左に曲がり、そこを降りました。この小さな廊下の突き当りに、二人の男、私服の男たちがいました。イヤホンや袖付けマイクなどを装着した、完全装備の男たちでした。二人は 30 代半ばに見えました。一人は 32 か 33 歳、もう一人は 35 歳くらいだったのでしょうか。その他にもう一人、小さなテーブルで座っている男がいました。小机のようなテーブルで、男はその脇に座っていました。私服で、年齢は二人より少し上のように見えました。40 歳くらいだったかもしれません。私はそこに近づいていきました。

彼らは明らかに私を待っていたようでした。守衛が電話をかけた相手は、彼らだったに違いありません。私は近づいていきました。マーシャは私に、身分証明書、写真付き身分証明書、弁護士証など、すべて持っていくようにと言っていたので、私はそうしました。私がそこに行くと、テーブルの人物が、身分証明書を見せてほしいと言いました。私は持っていたブリーフケースから身分証明書を取り出しました。彼に写真付き身分証明書とワシントン D.C.地区の弁護士証を見せると、彼は、結構です、ブリーフケースを持って入ってはいけませんと言いました。ところで、私は黄色のリーガルパッド（法律用箋）も取り出していました。私はそれを脇に挟んで入りました。

彼はこう言いました。“ブリーフケースを持ってそこに入ってはいけません。ノートもいけません。あなたが中にいられる時間は約 1 時間です” こうした制約はどこから来るのかと思いましたが、不平を言うつもりはありませんでした。なにしろ、私はただでこの機会を得られたのですから。私は、分かりましたと言い、ブリーフケースを置きました。しかしリーガルパッドは持ったままでした。私はそれを脇に挟んでいたのです。こうして私はその別室に入っていました。

私はドアを通過して入りました。最初、彼らはドアを開けたままにしていました。中に入るとテーブルが一つあり、その上に長方形の箱が 16 から 20 個ほど並べられていました。正

確な数は分かりません。箱は小さな靴箱ほどの大きさで、長さ約 2 フィート、幅約半フィート、深さ約半フィート（*約 60 センチ×15 センチ×15 センチ）でした。箱の色はベージュグリーンで、その側面には蓋を閉めるための小さなボタンと紐の留め具が付いていました。

どこから始めてよいのか分からなかった私は、こう考えました——持ち時間が 1 時間しかないなら……文書を読んでいたのではそれほど先に進めない。私は写真を探すことにしたのです。私が探すのは写真だと自分に言い聞かせました。実際、他とは違う箱がさらに 2 個あり、その中に小さなフィルムと小型プロジェクターが入っていました。私はフィルムをプロジェクターに通し、スイッチを入れました。こうして私はこれらの映像を見始めたのです。

それらは実際には……UFO を写した映像でした。その幾つかはすでに私が見たことのあるよく知られた映像で、これは機密ではないと気付きました。私はそれを箱に戻し、次の箱に移りました。私は機密の部分を探しました。なぜなら、私が見たかったのはそれだからです。私は箱の一つを脇に置き、次に移りました。それが機密の箱でした。箱には何も書かれていませんでしたが、留め具の紐を外して中を開けると、1 枚の小さな紙切れが入っていました。それに最高機密（top secret）と書かれていたのです。これこそ私が探していたものでした。

私はその紙切れを取り除き、小さな缶容器の一つを取り出しました。よく見ると、そこには灰色の小さな手回しマイクロフィッシュ・マシンがありました。つまり、ここで私たちは、小さな手回しマシンを操作して、存在するかもしれない銀河文明テクノロジーの一部を眺めようというのです。私は大急ぎでマイクロフィッシュ画像を調べていきました。それらは文書、また文書で、永遠に文書が続くかと思われました。しかし、ついに私はこれらの写真を探し当てました。1 枚目はすべて文書でした。私はそれを戻し、2 枚目にかかりました。

この 2 枚目も最初の半分はすべて文書でしたが、そのすぐ後に何枚かの写真がありました。こうして私はこの写真を探し当てたのです。それはそこにありました。これはまったく疑う余地のないものでした。これは墜落した 1 機の UFO だったのです。季節は冬で、地面には雪がありました。画像は白黒でしたが、巨大な溝の跡が見て取れました。その UFO は野原を突き進み、この土手の側面に衝突したようでした。それはいわば鼻をその中に突っ込んだ状態でした。後部は跳ね上がっていましたが、その下の雪が掘り起こされていたため、底部を完全に見ることはできませんでした。

周囲に建物などはなく、そこがどこなのか、私にはまったく分かりませんでした。写真には何の説明もありませんでした。私は次の写真を見ました。それはこの物体のクローズアップ写真で、米国空軍の関係者が写っていました。彼らはフード付き防寒着を着ていました。大きな毛皮防寒着で、フードを被っている人もいましたし、被っていない人もいました。彼らのジャケットには縫い込まれた小さな名札が付いていました。ですから、私はこ

れが何なのかを知り、大いに驚いたのです。私は次の写真を見ました。すると、ここにそれらがあったのです。

二人の空軍関係者がこの物体を測定していました。二人は大きな長い巻き尺を持っていました。一人は物体の一方の端に立ち、もう一人は物体の他方の端に立っていました。まさに現実そのものでした。彼らは微笑んでいるわけでもなく、興奮しているわけでもなく、ただ整然とそこに立って物体を測定していました。この物体の上部には小さな1個のドームがありました。この物体にあった球状の部分です。その側面は少し手前に傾いていました。そのため、私はそれを見ることができたのです。

そのドーム側面には、彫り込んだような小さな記号が並んでいました。これこそ私が探しているものでした。私はそれらの記号が何を意味しているのか知りたいと思いました。私は手回しでさらに2枚の写真を見ました。その最初の1枚は物体の写真を撮っている空軍関係者でした。つまり、彼らは物体の写真を撮っている人たちを撮っていたのです。物体の写真を撮っていたのは2、3人です。そのうちの一人は、映画撮影に使うような大きなカメラを持っていました。私は次の写真を見ました。すると、そこにそれがあったのです。それは物体のこの部分、記号が彫り込まれた部分を写した、白黒のクローズアップ写真でした。

私はそれを眺め、次に部屋のドアの方を振り向き、見張りを確かめました。今やドアはほとんど閉まった状態でした。“私にはこれをやる勇気があるか？” “もちろんだ、これを見逃す手はない” 私は素早くリーガルパッドを開き、厚紙の裏表紙までめくりました。次に、投射されたマイクロフィッシュ画像がリーガルパッドの裏表紙と同じサイズになるように、手回しマシンの焦点を調整しました。私はペンを取り、その記号をなぞりました。そこにあった長い記号列をすべてなぞりました。正確さを期すため、この作業には細心の注意を払いました。私は記号列を写し終えた後、マシンからマイクロフィッシュを取り外しました。それを箱に戻し、留め具の紐を締め、すべてを元の位置に戻しました。そして資料の閲覧を終えたので退去すると告げました。

あれから何年も経ちましたが、私には思っていることがあります。あのとき私は、少なくとも時間をフルに使い、この物体が何なのかを知る文書の類を探すべきではなかったかと。弁護士、調査専門家として、あれは愚かな行動だったと感じています。しかしともかく、それが私のとった行動でした。

スティーブン・グリア：少し戻りましょう。その物体はどんな様子でしたか？

ダニエル・シーハン：その物体の形ですが、それは典型的なものでした。それは……2枚の皿を張り合わせたような形です。上部には球状部分がありました。それは滑らかに高くなり、中央でその球状部分が盛り上がっていました。それは少し手前に傾いていましたので、その頂部はほぼ円形だと分かりました。この球状部分の頂部です。球状部分は土手にそれほど深くは突っ込んでいませんでした。泥の中に埋まっていたのは先端部分です。し

かしそれは少し持ち上がり、少し手前に傾いていました。ですから、私はその物体の大きさを把握することができたのです。

さて、そこにいた二人の空軍関係者ですが、彼らは何枚かの写真に巻き尺を持って写っていました。私はその巻き尺を読み取ることはできませんでしたが、彼らは大きくて長い巻き尺を、この物体の表面で伸ばしていました。この物体の直径は、おそらく……30 フィートほどだったのでしょうか。つまり、それは途方もなく大きいというものではありませんでした。おそらく 30 フィートか、35 フィートか、そのあたりです。それに窓はありませんでした。窓のようなものは見えませんでした。物体の縁（へり）も見ることにはできませんでした。それは少し手前に傾いていましたので、その縁つまり 2 枚の皿の合わせ目部分を見ることはできませんでした。

不思議なことに、私が見た写真はどれも同じ方向から撮られていました。まるでセットを見ているような感じでした。おそらく、これらの写真はすべて同じ撮影者によって撮られたものでしょう。ですから、私はその縁（へり）の部分を見ることができなかったのです。物体には窓も開口部もありませんでしたが、目を引くただ一つのスポットがありました。それが、これらの記号が彫られていた部分です。私の注意はそれに向けられました。ですから、私はそれを写し取ろうと思い、そうしたのです。その物体にリベット跡のようなものではなく、線もありませんでした。とても変わったものでした。それはすべてが一塊の金属からできているように見えました。しかし、陽の光を反射しているのが見えたというわけではありません。季節は冬でしたし、晴れた日のようにも見えませんでしたから。しかしそれは金属のように見えました。それは金属製でした。

スティープン・グリア： それは何だったと思いますか？

ダニエル・シーハン： これは UFO だったと思います。私は確信しています。私は生命体を見たわけではありません。しかし、これは彼らが知っているものの一つだという感じもしませんでした。ですから、その物体はそのようなものだったということです。こうして私はその部屋を出ました。私は彼らに笑顔を向け、自分のブリーフケースを引き取りにいきました。そのとき、テーブルで座っていた人物が私を見て、こう言いました。“シーハンさん、そこに持っているものは何ですか？” 彼はその黄色のリーガルパッドのことを言っていました。私は、これはただの黄色いパッドだと言いました。すると彼は、見せてほしいと言いました。私はあくまで平静を保ちながら、それを彼に渡しました。彼は黄色のページだけをパラパラとめくりました。しかし厚紙の裏表紙はまったく見えませんでした。彼はそれを私に返してよこしました。私は、ありがとうと言い、そのリーガルパッドを脇に挟みました。そしてブリーフケースを持ち、首尾よく右の方に歩き去ったのです。

[5]

=====

こうして私はイエズス会本部に戻り、デイビス神父の事務所に直行しました。私は、ビル、これを見てくださいと言いました。私はブリーフケースを開けてそれを取り出し、彼に見

せました。彼はこう言いました。“何ですか、これは？” 私は彼に見たことを正確に説明しました。ですから、それが起きたことの同時確認（contemporaneous confirmation）はあったわけです。彼がそれを日記や日誌の類に記したかどうかは分かりません。しかし様式はどうあれ、イエズス会本部にはそれが存在することを記録した何かがあるかもしれません。そのことに関して彼がどのような行動を取ったのか、私には分かりません。しかし彼にそれを見せたことは事実です。奇妙なことに、私はそのことでマーシャ・スミスに電話をかけたりはしませんでした。私はこれ（*記号列の写し）を手に取り、こう言いました。“これはすべて、私が SETI に行って講演をする準備の中で起きたことだ”

こうして私は SETI の人々のために講演を準備しました。私は SETI の人々にこの話はしませんでした。場違いなことだと思ったのです。私は神学的意味についてはすべて話しました。それは、彼らは何かを発見するだろう、だから彼らは今行なっていることに集中した方がよいという、より高いレベルの信頼があったからです。そして彼らには、そうなることに疑念はないと明確に伝えました。そこにいたのは米国空軍のグループでした。写真には物体を測定している二人の関係者が写っていました。その他に、別の写真を撮っている少なくとも 3 人の関係者が写っていました。

さて、最後の出来事です。数週間後、マーシャ・スミスから電話がかかってきました。彼女は、ジェット推進研究所での講演を SETI の人々は大変喜んでいたと言い、彼らが作成した報告書のコピーを見せてくれました。私は実際にそれらを持っています。彼女が私にくれたものです。その一つ目は、地球外知的生命体が存在する可能性についての報告でした。二つ目は UFO 現象の分析でした。私はそれらに目を通しましたが、一つ目の内容には大変驚いたのです。それはこういう書き出しで始まっていました。“議会調査局は、非機密および機密扱いの資料を再調査し、次の結論に得るに至った： 我々の銀河系内には、少なくとも二つから六つの、高度な技術的進化を遂げた知的文明が存在する” それは事実だけを述べた、とても簡単なものでした。そして、これが大統領に上げられた情報だったのです。

UFO の項目では、これまでに報告されている機体の形は 7 種類か 8 種類であるとし、空軍によるプロジェクト・ブルーブックを含むこれまでの調査から、そのうちの 20 パーセントは何らかの輸送機についての信頼できる報告であると指摘していました。彼らの結論によれば、それらは米国のものでソ連のもでもなく、その技術力の高さは、この惑星で知られているどの国がつくったものでもないことを確実に示していました。

しかし、彼らは次の段階に踏み込むことをしませんでした……“それゆえに、それらはどこか別の惑星から来たものに違いない” 彼らは報告書の中でそうは述べませんでした。どういう事情でそうしたのか、私にはとても興味深いことです。結局、私はそれらの報告書のコピーを貰いました。ですから、私が持っているのはこれらの二つと、私がそこに持っていった黄色いパッドの小さな裏表紙です。

[6]

=====

これ（*UFO 問題に関する秘密主義）については考えてきたことがあります。私はこれまで 30 年間、一人の憲法学者、また開業弁護士として、かなり関心を引く事件にも取り組んできました。ペンタゴン・ペーパーズ事件に始まり、イラン・コントラ事件では、オリバー・ノース中佐に協力していたリチャード・セコードとアルバート・ハキムの会社を相手取って起こした民事訴訟の首席法律顧問を務めました。私はこれについての深い分析、憲法上の分析を行ないましたので、この秘密主義が中立法に違反していることを完全に確信しているのです。

中立法は合衆国法典第 18 編の下にある連邦法規で、議会の承認なくしては、合衆国以外のどの団体に対するいかなる種類の戦争活動にも、一般市民は関わることはできないと定めています。そして以前に機密扱いであった文書に関して私が行なった分析に基づけば、明らかに情報委員会、上下院の情報特別委員会はこのことを知りません。これについて知らない米国大統領は何人もいました。私は一度、この問題についてローランス・ロックフェラーと話したことがあります。ローランス・ロックフェラーは直接クリントン大統領に会い、この問題について訊ねました。彼は私に、クリントンもこれについては知らなかったと述べました。彼はそれを確信していました。クリントンは嘘が得意でしたので、知っていても知らないと言ったかもしれません。それは分かりませんが、ローランス・ロックフェラーはそう確信していたということです。

ですから、私は強い確信を持ってこう言えます。これ（* UFO 問題を秘密にする行為）はこの国で今も続いている反憲法的活動です。これに関して指揮系統、軍の指揮系統は無いも同然になっています。これに関して合法的な指揮系統は無いも同然です。ウォーターゲート盗聴侵入事件、ニクソン弾劾公聴会などを経て、情報委員会の設置が合意されました（*情報機関による権力の濫用を防止し、その活動を監督するために、1976 年に上院情報特別委員会が、1977 年に常設下院情報特別委員会が設置された）。彼らは明らかに、この問題に関しては指揮系統を踏みにじっているのです。

難しいのは、それが連邦刑法であることです。ですから、司法省を引き込まなければなりません。しかしその方法があります。RICO 法（威力脅迫および腐敗組織に関する連邦法）の下では、前提行為の一つ、または民事訴訟を引き起こす犯罪行為の一つがあれば、それは中立法違反になります。私の考えでは、これまで見てきた証拠、以前は機密扱いだった証拠、今やこれについて語っている人々と話してきた証拠に基づけば、おそらくこれは 8 ないし 10 の主要な連邦法規に違反しています。少なくともそのうちの半分は、RICO 法的前提行為です。ですから、民事訴訟が成立する相当な理由があると私は考えています。

当事者適格の問題は重要です。国民の中で誰がこのような訴訟を起こす当事者適格を有しているのでしょうか？ それは重要な管轄権の問題です。これに答えを出さなければなりません。米国民として、専門的な民間の調査に資金を提供することがきわめて重要だと私は考えています。私はこれまでの調査に基づき、またペンタゴン・ペーパーズ事件、カレン・

シルクウッド事件を経て、完全に確信しているのです。私はオクラホマ州で起きたカレン・シルクウッド事件の首席法律顧問でした。私は、いわば公益検事総長として五指に余る大がかりな犯罪捜査を行ない、成功してきました。私たちはこれを成し遂げることができました。私たちは国民として、ここで何が起き、どのような種類の刑法犯罪があったのかを見つけ出し、訴訟を起こすことができました。

さて、ブッシュ新政権が任命している連邦司法機関の現状を考えると、彼らが憲法上の義務を正当に遂行するかどうかは樂觀できません。私の考えでは、彼らは連邦主義協会とハッチ上院議員により選ばれています。ハッチ上院議員は、これらの任命を監督する上院司法委員会の委員長です。その選考過程を見れば、おそらく近い将来、私たちは憲法をまったく順守しない約 60 人の新たな連邦判事を持つことになるでしょう。しかし憲法上の疑問は正当なものです。ですから私は、この国のまっとうな憲法学者の 99 パーセントは私に賛成するだろうと確信しています。つまり、これは合衆国憲法に対する違反であり、この問題を正すために民事訴訟が成立すべきだということです。

[7]

=====

スティーブン・グリア：この種の秘密を維持することなどできないという主張があります。それについてはどう思いますか？

ダニエル・シーハン：それは絶対に真実ではありません。明らかに、秘密を維持することは可能です。政府が隠し続けてきたある種の秘密を暴くために、私は相当な調査を行なわなければなりません。今日に至るも、人々はこれらの物事を知りません。

たとえばカレン・シルクウッド事件です。オクラホマ州のカー・マギー社がその民間核施設から、イスラエル、イラン、南アフリカ、ブラジルへ、純度 98 パーセントの核兵器級プルトニウムを密輸していたことを、国民はまったく知りませんでした。しかし中央情報局（CIA）はその情報を知っていました。彼らは作戦本部のイスラエル・デスク（担当部署）に便宜を図っていたのです。私は下院通商委員会／エネルギー・環境小委員会のピーター・D・H・ストックトンに、私信でこの情報を伝えました。そしてストックトンは、ジョン・ディングル下院議員に私信でこれを伝えました。ディングルは CIA 長官のスタンスフィールド・ターナーにこの情報を突きつけ、調査を要求しました。CIA は調査を行ない、それが事実であることを認めました。しかし、それでも彼ら（CIA）は米国民にそのことを言わなかったのです——米国が主要な調印国になっている核拡散防止条約の、完全かつ全面的な破棄でした。今ここで座ってこれを聞いているあなたは、それを知りませんでした。ニューヨークタイムズ紙はそれを知りません。他のメディアも知りません。ニューヨークタイムズ紙は、たとえ知っていたとしても記事にはしないでしょう。

よろしい、政府は秘密を維持することができるか？ この質問の第二部です。多くの人々はワシントンポスト紙、ニューヨークタイムズ紙、ボブ・ウッドワードや調査報道のサイ・ハーシュといったジャーナリストなら、この種の物事を明るみに出せるのではないかと考

えます。しかし第一に、彼らは必ずしもその情報に出会うとは限りません。第二に、これはさらに重要ですが、もしその情報を得たとしても、彼らはそれを記事にしないかもしれません。私はペンタゴン・ペーパーズ事件のとき、ニューヨークタイムズ紙の法律顧問でした。これらの記事を出そうと真っ先に言ったのは私です。1971 年 6 月のその日の朝、私はジェームズ・グッデル、フロイド・エイブラムズ、ジーン・シャインマンとのミーティングの席で、今すぐこれらを記事にしてくださいと言いました。

しかし、彼らは全員及び腰でした。これらを記事にすべきではないだろうというのです。実を言えば、私たちはテディ・ソレンセン（*ケネディ大統領のスピーチライターで大統領顧問）から提供された宣誓供述書も持っていました。彼が CIA 長官への指名を取り下げられたのはそれが理由だとされていますが、それはペンタゴン・ペーパーズ事件の連邦判事マレー・グーフィンに提出されたものでした。彼はその中で、ニューヨークタイムズ紙は機密扱いだと分かった情報を通常は公表せず、記事にすることを拒否すると証言しているのです。さて、あなたは今、そのことを確実に知っている直接証人の個人的証言を聞きました。ニューヨークタイムズ紙、ワシントンポスト紙、等のメディアは、こうした情報は記事にしないのです。ですから、もしそうした秘密の事柄がプロの調査ジャーナリストの手に渡ったとしても、米国民がそれを知ることにはなりません。政府はこの種の秘密を維持することができるか？ その答えははっきりとイエスです。私はそのことを 100 パーセント確信しているのです。しかし、彼らのあらゆる努力にもかかわらず、ある意味で秘密の維持には成功してきませんでした。どういう意味か分かりますか？ なぜなら、何千人もの人々がこうした物事を見てきたからです。

スティーブン・グリア： 先日あなたが述べたことに戻しましょう。

ダニエル・シーハン： それは質問の第三のポイントです。中央情報局（CIA）と国家安全保障局（NSA）は、米国内の主要な全国ニュースメディアの内部に工作員を置いています。実際に、私はそれを裏付ける機密文書を見たことがあります。そこには、その文書を見た 1990 年、今から 11 年前の時点で、米国内の主要なニュースメディア上位 10 社に、CIA、NSA、軍の情報機関から送り込まれた 43 人の人物がいると書かれていました。彼らはフルタイムの正社員として職員名簿に名を連ね、国家安全保障に関わる情報が報道されないようにする任務を負っていました。ですから、私はそれが本当であることを知っているのです。彼らとは直接話したこともあります。彼らは私に、それが自分の正体であり、任務だと認めました。なぜなら、彼らはイラン・コントラ疑惑が起きたとき、ニュース記事の一つを葬ったからです。ワシントン D.C.のタイムマガジン社には、フルタイムの CIA 工作員が一人いました。彼は国家安全保障担当の記者でした。

スティーブン・グリア： そうすると、私たちが思い込んでいる真に自由な報道機関なるものは虚像だと？

ダニエル・シーハン： まったくの虚像です。それはつくり上げられた虚像にすぎません。私はイラン・コントラ事件のときのニューヨークタイムズ紙記者キース・シュナイダーを

通して、国際部デスクのウォーレン・ホッジたちにすべてのデータ、決定的なデータを渡しました……飛行機のテールナンバー、麻薬密輸作戦など、彼らがやっていることのあらゆるデータです。そのキース・シュナイダーが最高裁判所前の1番通りに立ち、私にこう告白したのです。“ダン、知ってのとおり、私たちニューヨークタイムズ紙の記者は、情報機関内部にとってもよい情報源を持っています” 私——“そのとおりです、キース。今あなたが話している相手は、ニューヨークタイムズ紙の法律顧問をしていました。私はそのことについては完全に知っているのです。私たちはデディ・ソレンセンから宣誓供述書まで取ったのですよ” 彼——“でも、はっきり言って情報機関にいる私たちの情報源は、あなたの話を確証しないでしょう。だから、ニューヨークタイムズ紙もそれを報道することはないでしょう” これが、今の米国で自由な報道機関と言われているものの実態なのです。

スティーブン・グリア： ありがとうございます。

(訳： 廣瀬 保雄)